

本多勝一

ルポ短篇集

本多勝一

ル。木短篇集

本多勝一（ほんだ・かついち）

1933年長野県に生まれる

新聞記者

〈主な著書〉

『中国の旅』（朝日新聞社）

『ルポルタージュの方法』（すずさわ書店）

『事実とは何か』（未来社）

『きたぐにの動物たち』（実業之日本社）

『初めての旅』（スキージャーナル社）

〈編書〉

『ペンの陰謀』（潮出版社）

『虐殺と報道』（すずさわ書店）

本多勝一ルポ短篇集

1981年6月10日／第1刷発行

著者／本多勝一

発行者／初山有恒

印刷所／共同印刷株式会社

発行所／朝日新聞社

〒104 東京都中央区築地 5-3-2

電話 03-545-0131（代表）

編集・図書編集室 販売・出版販売部

振替 東京 0-1730

定価／1200円

0036-254868-0042

目次

オホーツク海沿岸の開拓地	5
支笏湖ユースホステル	14
千羽ヅル	18
シリベシ山麓にて	21
日高の校長先生	28
奥高見部落の先生たち	34
『ひかりごけ』の舞台を訪ねる	41
山の遭難・調査報告書	47
薬師岳13人遭難事件の周辺	56
荒川岳の五人を考える	64

北洋——独航船の記録……………70

故郷に死を選んだ78歳……………129

足和田災害はこうして起きた……………132

ある重度身体障害者の旅……………139

北千島の漁場——「北洋」その後……………145

アイヌ民族の現在……………159

だれが「三里塚」でもうけたか……………164

ムギとロッキード……………176

田中角栄を圧勝させた側の心理と論理……………201

脳性マヒ者と養護学校義務制……………227

屋久杉……………233

霧に包まれた“北洋伏魔殿”……………252

朝日連峰ブナ原生林……………258

郭沫若氏の日本脱出をめぐって……………	266
都市ガス工事の負担金とは何なのか……………	275
芸能山城組とケチャまつり……………	280
尺八と伊那谷のアメリカ人……………	286
革命イランの暮らしぶり……………	292
なぜイルカなのか……………	300
なぜ日高中央横断道路を通すのか……………	310
「秘境知床」は消えた……………	319
あとがき……………	325

一、数字の表記は万進法（日本式）とし、千進法（西歐式）を排します。たとえば――

× 五〇三、九八七、一四六円 × 503,987,146円

○ 五、〇三九八、七一四六円 ○ 5,0398,7146円

○ 五億〇三九八万七一四六円 ○ 5億0398万7146円

× 五億〇三、九八万七、一四六円 × 5億03,98万7,146円

（理由は拙著『貧困なる精神・第1集』Ⅱすずさわ書店Ⅱ収録の「数字表記に関する植民地的愚拳」参照。）

二、人名はすべてその人物の属する国の表記法の順序そのままを使います。たとえばイギリス人やフランス人は「名・氏」の順ですが、日本人や中国人やベトナム人は、たとえフランス語やイギリス語の文中であっても「氏・名」の順です。（理由は『貧困なる精神・第11集』の「あとがき」参照。）

三、The United States of America は「アメリカ合衆国」と訳し、「合衆国」とは書きません。（ただし、「合衆国」が誤りだと主張するわけではありません。理由は拙著『アメリカ合衆国』Ⅱ朝日新聞社Ⅱの「付録3」参照。）

四、ローマ字は日本式（いわゆる訓令式）とし、ヘボン式を排します。（理由は『貧困なる精神・第9集』収録の「ローマ字は日本式でなければならない」参照。）たとえば、shi-esi, sho-syo, chi-ti, tsu-yu.

五、外国語のわからず書き部分をカナ書きにする記号は、ナカテン（・）を排し、二重ハイフン（＝）とします。（理由は拙著『日本語の作文技術』Ⅱ朝日新聞社Ⅱ第四章で述べた使用法と分ち書きとの混用を避けるため。）たとえば――

× ホー・チ・ミン、ジョン・F・ケネディ、毛沢東の三人。

○ ホー・チ・ミン・ジョン・F・ケネディ・毛沢東の三人。

〔注〕 章見出しの下の（ ）の中の日付は『朝日新聞』に掲載された日です。「北海道版」とされている以外は、東京本社版ですが、大阪・西部・名古屋本社版にも出たかどうかは、記事によって違います。

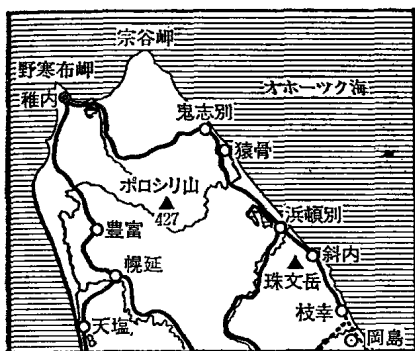
オホーツク海沿岸の開拓地

(一九六〇年三月二日・北海道版夕刊)

枝幸町^{えさき}の海岸ぞいバス道路から五キロほど内陸へ雪道を登ると、起伏のゆるい谷間に一四戸の岡島開拓部落がある。その中の一軒、江藤さん(仮名)宅に、私は一夜の宿をお願いした。江藤さんの家は一見して部落の中でも一番「住宅事情」が悪いようだ。草ぶきの屋根は腐って今にもつぶれそうだし、板壁はボロでつぎはぎをした乞食の着物みたいである。

入り口の板戸を開いて暗い家にはいったとたん、右から馬の顔がいきなり突き出て、あぶなく衝突するところだった。少し驚いたけれど、平気をよそおってさらに二、三步はいったら、こんどは左から牛が角を出した。この家は畜舎と住宅が一棟になっていて、家畜にはさまれた通路から「奥座敷」へ行くのである。奥座敷は、すき間だらけの板壁をへだてて牛の部屋の隣にある板の間だ。八畳敷ほどの広さだが、ムシロはそのうち半分しか敷いてない。以上がこの家の間取りのすべてである。まん中にカシワの生木が一本はえて、屋根をぶちぬいている。これを大黒柱にして家を作ったのだろう。目ざまし時計が一つ、枝にぶらさがっている。

去年までは、この牛の部屋と奥座敷との境がなかったそうだ。道理でこの部分だけは、薄いけれど



もまだ新しい板である。それまでは、ガランドウの見通しの中に、人間も牛もすんでいた。奥座敷に牛がはいってきて一緒に寝るのは困るから、大黒柱につないでおいたという。牛のいるところは、もちろん牛が大小便をするので、いっそのこと人間も一緒にしちまえということになって、牛の部屋イコール便所にした。これは今も同じだから、みんな牛に向かって小便することになる。私もしてみたけれど、牛はなれっこになっているせいか、怒った様子はないようだった。

ストーブのそばに、黒と茶色のきたないぶちのネコがいる。ぶちの様子が大変めずらしいのでよく見たら、黒こげにこげているのだ。こげたネコというものはじめて見たから、いったいどういふわけなのか江藤さんにきいた。

「なに、ストーブに近寄りすぎるから、冬になるといつもこげてるんですわ」

こげるほどネコが近寄る理由は、この家の構造にある。あんまりすきまだらけで、外気と大差のない寒さだから、寒がり屋のネコはウカツにも灼熱のストーブにからだをすりつけてしまう。このころオホーツク海沿岸は、三月中旬としては二〇年ぶりの寒波に包まれたとかで、マイナス三〇度をしばしば越えていた。

江藤さんは五五歳である。ストーブのそばに私がすわりこみ、名刺を出すやいなや、いきなりこの地区選出の一道議員を非難しは



江藤さんの家、手前は牛舎兼便所（撮影・浅沼昭太郎）

じめた。町役場の手先を使って、あくどい手段で競争相手をたたきおとしたこと。その手下の一人は国民健康保険の金を使いこんだこと。この「ボス」が、営農資金の開拓者への貸し出しをじゃまし、牛馬のための融資をさせないのであること。地元新聞さえもボスと結んで、開拓者の苦境を書かないこと。このボスが力をもってる限り、この部落は浮かばれないこと……。

せきを切ったように訴えつづける江藤さん。よほどガマンがならなかったのだ。二八歳になるという長男もそれに加わって、とどまるところがない——「わしら満州引き揚げ者に対して、当時の地元の連中はまったく冷淡でした。家を作るのに必要な板を運ぶのに、馬一びき貸してくれない。ニシンを混ぜたフキばかり毎日食ってたもん

です。引き揚げ者の入植者は、なにもかも憎悪してるわさ。自然も、役人も、地元民も。ここの自然ときたら、ガスと低温で万年冷害みたいなもんなんだから。それに何よりも、ほれ、あのボスを憎んでるなあ」

江藤さんは、一九三四年（昭9）に家売り払って満州へ渡った。大連の近くで三〇ヘクタール（三〇町歩）ほどのリンゴ園をひらき、現地の男六人は通年、女二〇人は年五か月雇って、一九四〇年ごろには当時の金で年に五万円も利益をあげたそうだ。ソ連の参戦で追われていたとき、逃げのびながら江藤さんは思った。――「山小屋でもいいから、自分の家に落ちつきたい」

敗戦に続くドサクサの間に、上の娘三人は栄養失調で死んだ。「満人（中国・東北地方の人）をコキ使った報いかもしれない」と、江藤さんは考えた。そんな話をしている最中に、突然「それにしても、あのボスの野郎め」と、彼は改めて怒りなおしたりする。一七四七年（昭22）に帰国してしばらく九州の炭鉱で働いたのち、奥さんの郷里である福井へ行った。しかし江藤さんにとっては、そこは気がねだった。束縛は大きらいだ。貧乏してもいいから、北海道へでも行ってやれ。

かくてこの開拓地へやってきたのだが、そのとき江藤さんの頭の片すみには、満州で大成功したりリンゴ園の夢が宿っていた。これがかえって失敗の第一原因だったと、今も反省している。開拓にはいつて七年目に、役人の「成功検査」があった。開拓結果が「成功」だったかどうかを戸別に調べて、成功とみなされない家は減反、つまり未耕作の開拓地を減らされる。減反の対象になった家が、江藤さん宅を含めて部落に三軒あった。他の二軒は役人にすがりついて拝み倒したが、江藤さんは「こん

なひどい条件じゃ耕作できない」と文句をいったので、減反されてしまったそうだ。機械営団は、三五アール（三反五畝）おこしただけで二五〇アール（二町五反）と報告し、あとは目をつぶってくれといった。しかたがないから残りは自分でおこしたという。一九五三年（昭28）からは経営を長男に引きついだ。今いる一頭のホルスタインは二年前に入れたものである。それまではイモとエンバク作りを毎年やっていたから、あけてもくれてもイモの主食ばかり続いていた。「こんな家だけど、あのころの生活にくらべたら上ですよ」と息子さんはいった。

娘を一人、嫁に出した。「なんとか家内がほしいんだが、長男に。このわしにやあどうにもならん」と江藤さんが嘆息すると、息子さんも一緒に嘆息した。次いで江藤さんが――「内地じゃあ恥ずかしい家じゃなかったんだがなあ」と独白し、しばらく黙っていたかと思うと、涙声になって言った――「役人どもの『調査』は、駅からおりて一ぱい飲まされて、いいことばかり書いて帰るだけだ。たまにこの部落にいくると、明るいうちにと急ぎ足で寄って、役場の者にせかされて軒先を通過しちゃう。あれで何がわかるもんか。でもあんた方は、こんなに奥まで来た上で、泊まりこんで調べてくれた。こんな嬉しいことは……実際……はじめてだなあ」

寝袋にもぐると、ブタのイビキがよくきこえた。ここの家畜は、牛一・馬一・ブタ五・ニワトリ数羽。あくる朝起きたとき、江藤さんは「けさはどこに生んだかな」といって、産卵場所が決めてないニワトリを追いながら、馬の部屋や牛の部屋をのぞきまわっていた。

*

*

珠文岳のふもと、斜内あたりの沿岸漁民の中には、乳牛を飼っている家もかなりある。むしろ漁業は副業になりつつあるようだ。酪農中心の農家じゃなくて酪農中心の漁師というものも、かなり北海道の現象だろう。オホーツク沿岸漁業はそれほど絶望的になった。かつてのニシン網は、山の開拓地で鳥害よけなどに使われている。

猿払村の猿骨部落には一六戸の開拓農家がある。この部落は、北海道での開拓政策の愚劣さを典型的にあらわしている場合のひとつだと思う。天正年間（一五七三～九二年）にはこの宗谷地方も松前藩の警備地に属していたが、猿払村（当時は宗谷村）には和人の足跡はまったくなかったようだ。寛政年間（一七八九～一八〇一年）になって、村山伝兵衛が宗谷漁場の開拓を始め、初めて和人が移住している。幕府が蝦夷地全体を直轄領とするようになった文化年間（一八〇四～一八年）から、ここは秋田藩の藩士が駐在した。明治二年（一八六九）の北海道開拓使制実施とともに、初代宗谷開拓判官の竹田信頼が来て農業を奨励したというが、産業の中心はやはり漁業だったようだ。とくに明治三〇年（一八九七）ごろから、ニシンやホタテガイの新魚場発見にともなつて、原始林を背景とした林業とともに、開拓のスピードは速くなった。鉄道は大正一一年（一九二二）に敷かれ、同一三年には猿払村が宗谷村から分村・独立した。

しかし、農業開拓が本格化したのは戦後になってからである。もともとは漁民の凶漁対策と造材業者の食料補助手段でいどの副業から出発していたが、敗戦と同時に入植者をむかえて、にわかに農業主体の人口がふえてきた。沿岸漁業の不振がそれに拍車をかけた。

猿払村猿骨部落は、こうした背景のもとに戦後ひらかれた開拓地である。一九五〇年（昭25）に最初の七戸が入植した。しかしそのうち六戸は離農して去っている。現在（一九六〇年）の一六戸は、その後くりかえされた入植と離農のプラス・マイナスの結果だ。次々と入植し、次々と離農する。そのたびに巨額の政府貸付資金（つまり税金）がムダになってゆくのである。ムダな工事も多い。ヤチ（泥炭地）だらけだから、たとえば高さ一メートルの盛り土をした道路がたちまち沈下して三〇センチくらいになってしまふ。これも税金だ。こういう開拓地をいか所でも実見すれば、たとえば中谷宇吉郎の「われわれの税金をドブに捨てる事業」ということは（「北海道開発に消えた八百億円」『文藝春秋』一九五七年Ⅱ昭和三二年四月号）が、けっして大げさなものではないことがわかる。

もともとこの自然条件が農業には極度に悪い。冬が長く、夏の気温が低く、ガスのおかげで夏でも日照時間が非常に少なく、雪どけがおそく……という気象の悪さは、たとえば根釧原野や十勝山麓でも似たようなものかもしれない。しかしこは、火山灰地以上に始末に困る泥炭地である。さらに致命的なことに、春になると毎年のように洪水が起きる。天塩山地の末端とはいえ、ポロシリ山（四二七メートル）などのふところ深く位置するこのあたりの開拓地は、根釧原野などでは想像もつかない現象に悩まされる。春さき、まだ泥炭地が凍り、川も氷が盛り上がって土手と同じ高さとなっているうちに、深くつもった山の雪がとけだし、とけた水は凍土の上から地下に吸われないまま部落に押しよせてくるのだ。シベリアのオビ川は、春になると北極圏に近い下流が凍っている間に南の上流から出水し、ヴァシューガン湿原に水があふれて湖と化す。現象的にはこれと似たような洪水だろう。木

を切りすぎたことも大きな原因になっているようだ。

こういう土地を農地にしようというのだから、金がかかるのはあたりまえである。沈下する開拓道路をツギハギ補修し、湿地の排水工事、川の拡幅工事、築堤工事、浚渫しゅんせつ工事、なんとか工事、かんとか工事、工事工事工事……。泥炭地の水は硬水が多く、そのままで飲料水にはできないのだが、水道工事などしたら三億円かかる。この前年（一九五九年）には、隣の狩別かりべつ部落が全戸集団赤痢になった。電灯なんか、もちろんない。ランプの下の仕事と栄養不足とで、目の悪い人が多い。乳牛を飼っていても、冬になると積雪一メートルを越えるから集乳トラックが来ず、乳は家畜の餌にしてしまう。小学校児童は、学校が遠すぎるのと、家の手伝いとで、長欠児童だらけ。

いくら金をかけて工事しても、成果があれば問題はないが、入植して一〇年になろうとする一九五九年度の経済調査によると、猿骨部落の平均所得は八万一千四百〇〇円。家計費は一万四千〇〇円。三万円以上の赤字だ。しかも所得のうち、農業所得は九四〇〇円にすぎず、あとの七万二千〇〇円は農外所得、つまり出かせぎによるものだ。借金はふえ、利子もふえ、年に一万円たらずの農業所得をあげる開拓者。その入植にカネをかけ、離農にカネをかけ、選手交替でまた入植にカネをかけ、その間あらゆる工事にカネをかけ、われわれの税金はどんどんドブに捨てられてゆく。これだけのカネを、全部失業資金として現金で渡し、その利子で食わせるほうがずっとマシだと、猿払村役場にいる土木関係のある技師自身がいついていた。

柴田さん（仮名）は、猿骨部落の中では最も経済状態がよいほうの開拓者である。それでも柴田さん

は、将来に絶望して語った——「五、六年も一生懸命働いて借金がふえる一方とは、まったく思いもよらなかったことです。昭和二年には九月五日に寒波がきて、野菜や花にツララがさがったもんです。あくる三〇年には大洪水にやられるし、三一年には大冷害だし……。一六〇万円もって入植したのが、今じゃ借金六〇万円ですからね。牛は一〇頭いますが、七頭は雄で、肉牛用です。だって、乳の出荷に冬は五時間もかかるし、それで一升四〇円にしかならんのじゃあ、酪農振興もヘッタクレもあったもんですか。羊や馬・豚もあわせると家畜は二七頭になりますが、冬になると糞が凍りついて、ツルハシでないと破壊できなくなりますから、糞さえ始末できない状態なんです。もうこれ以上家畜はふやせませんね。最近、不幸にして〃馬の子が生まれたけれど、やせてしまっただうしようもないから手放しました。この近くの田中さん宅じゃあ、馬が栄養失調できのう死んだばかりです。考えてみりゃあ、三〇年度か三一年度に見切りをつけて離農すべきだった。今となったらもう泥沼で、それさえできませんわ。この土地はもともと鉾山の三井と製紙の王子から国が買い上げたものなんです。ね。一番いい方法は、またそっくり三井と王子に返しちまうことじゃありませんか」

いや、北海道はもともとアイヌ民族の土地だったのだから、もっといい方法は「そっくりアイヌたちに返しちまうこと」かもしれない。

支笏湖ユースホステル

(一九六〇年九月一三日・北海道版)

北海道でも二三年前からユースホステル運動が盛んになりはじめ、現在道内のホステルは三二か所にのぼっている。これらホステルのほとんどは旅館が兼ねていたり地方自治団体経営の「準専用ホステル」だが、支笏湖畔にさる七月ユースホステル協会専用のユースホステルが完成した。この支笏湖ユースホステルは日本最初の本格的ホステルで、旅行の最盛期をすぎた今でも毎日四〇人前後の会員が利用している。ところが立派なホステルができた半面、ユースホステル運動の本質を認識していないホステラーがふえてきた、という批判の声が出ているので、新ホステルの紹介をかね、開いて二か月になる支笏湖ユースホステルを訪ねてみた。

「絵のような……」というけれども、実際そういう環境にたてられ、そういう雰囲気をもった家は少ない。だが支笏湖ユースホステルは正に絵のような建物だ。緑の木立ちにかこまれ、三角の赤い屋根をめぐらせたホステルは、ロマンチックで、野性味があって、適当にバタクさく、スイスあたりの湖畔の宿を思わせる。ただ「支笏湖畔」のさわがしい「市街」からもう少し離して建てたら、もっとよ